デイブはロリポップマンだ。毎日忙しい横断歩道に立って、朝 8:15 から 8:45 と、午後
3:30 から 4:00 までの間、金属のロリポップを持ちながら子供達が安全に渡れるように誘
導している。”ロリポップ”という単語を読むと、私たちは棒についた丸くて平べったいお
菓子を想像するが、ロリポップマンのロリポップはそのような食べるものではない。そ
れは、ロリポップマンが車に子供達が渡ると警告するサインである。形はお菓子と似て
いるが、これは金属からできており二メートル近くにもなる。
「もともと私は去年まで学校の目の前で働いていました。けれど、信号機が導入され
たから私がいる必要がなくなったんです。本当に悲しかったよ、そこに立つのが好きだ
ったので。みんなが来たり行ったりするのを見ていると、全てのものの中心にいる気が
しました。子供たちはみんな私の名前を知っていたから、お母さんやお父さんまでもが
知っていました。今はもう、今までの半分くらいの子供達が見れたらラッキーなくらい
です。ここではひとりぼっちで、全てのもののはしっこにいる気がします。」
デイブは明るい黄色のウォータープルーフレインコートに白い帽子を被っていて、ど
れだけ暗くてぼんやりと湿った真冬の午後でも見つけやすい。
「12 月や 1 月は、子供達が学校にいく時間はまだ暗くて、学校が終わる三時半にはも
う太陽は沈んでいます。もし私がこんな格好をしていなかったら、車の運転手は私を見
て停まれない。それだと子供たちの役に立てないでしょう、そう思いません？」
デイブの仕事は明らかに愛があってこそのものである。子供が大好きだからやってい
るのだ。危ない交差点で子供たちを渡らせるのを助けるデイブに議会はお金を払ってい
るけれど、もし払われていなかったとしてもこの仕事をしているであろう。
「この仕事の前、私は王室海軍でした。25 年間海にいました。私はなぜ我慢できてい
たのかわかりません。会社のための人は誰もおらず、疲れ果てた男性クルーだけで海に
出ていました。女性も子供もいなかったのです。その頃はただ単に許可されてなかった
ので。それはまるで光のない世界にいるみたいでした。私がそこを離れてからいくつか
変わったとは聞きました。どうやら、今では軍に女性がいるらしくて、それだったら海
での生活はまた違ったように感じていたんじゃないかと想像しましたよ。ちょっと待っ
てね、子供達がきました。」
デイブは歩道から降りて、来ている車に停まるようにと左手をあげた。金属のロリポ
ップを道路の真ん中に置いて、フードの中からひょっこりと顔がのぞいている子たちに
手を振った。
「みんな大丈夫かい？いけ、今だ！」
「デイブ、ありがとう！」